建築リフォーム工事業

人や企業の「個性」を彫り込む技能士の腕

7－5　株式会社　小林インテリア

ライフスタイルの変化と歩んだ１世紀

長野県岡谷市にある株式会社小林インテリアは、襖（ふすま）や障子などの「表具（ひょうぐ）」と呼ばれる日本の伝統的なインテリアから、カーペットやカーテンなどの洋風のインテリアまでを幅広く取り扱う企業である。

同社の歴史は古く、創業は大正 3 年（1914 年）である。「伝統的な日本家屋の基本パーツを今では表具といいますが、もともと経巻（お経や巻物）を保護するものだったんです。それが徐々に掛け軸や床の間、障子や襖といった部分までカバーするようになり、その中で「美しさ」という観点も生まれてきました。空間の中にいかに美しさを見出していくか、ということを昔の人は考えてきたんですね。」と表具の成り立ちについて説明してくれたのは、代表取締役の小林武志氏。

戦後、海外から洋風のライフスタイルが輸入され、富裕層を中心に応接間と応接セットを持つことが一種のステータスとして認識されるようになると、小林インテリアはいち早く洋風インテリアのプランニング・販売を業務に取り込んだ。中学卒業と同時に内装の世界に飛び込んだ小林氏は内装の世界に触れたのが早い分業界の移り変わりにも敏感だった。今後新しい内装を必要とすることを察知して業務拡大に踏み切ったのである。「当時は建築業者もうちに『クロス（壁紙）というのは一体何だ？』と聞きに来たくらい普及していませんでしたね。」

表具とインテリアの共通点

伝統的な日本の表具の世界から、洋風の内装へと業務を拡大した小林インテリア。両者は全く異なるものに思えるが、両者は「貼る」という点で同じであると小林氏は言う。確かに、表具もインテリアも、対象や素材が異なっても、必要とされる技能が「ものとものを貼り合わせる能力」という点では共通している。小林インテリアの業務拡張もそういう「技能の互換性」があったからこそ可能だったと言えるだろう。そして、それを支えるのが同社の職人たちである。

同社の従業員 26 名のうち、17 名が表装や内装仕上げといった職種の技能検定に合格している。技能士でなければ仕事ができないわけではない。しかし、「仕事をするからには、顧客に認められるような仕組みを作っていかなければならない。」と考えた小林氏は技能検定受検を積極的に後押ししている。技能検定合格者に対する受検費用の補助、2 級技能士には 2 万円、1 級技能士には 3 万円が月給に上乗せされる制度など、技能検定受検へのインセンティブは手厚い。

技能士がもたらす業務の効率化とＣＳの向上

「勉強した職人の腕は、していない人とはやはり違いますね。差は歴然としています。」と技能検定委員も務める小林氏は言う。腕の良い職人は現場での対応力が違う。業務上の意思決定について、自ら判断を下せるために、意思決定のプロセスが迅速である。また、それが顧客満足の向上にもつながる。時には顧客から仕事の依頼が指名で舞い込むこともある。技能士の存在が、その仕事ぶりを通して競合との差別化に一役買っているのである。

「現場の最初の仕事は掃除から」の意味

「壁だけ、床だけ、といった特定のことしかできない職人ではなく、何でもできるような技能士を育てていきたいですね。そのために、入社したらすぐに現場を経験してもらっています。最初は掃除からスタートです。」

最初は掃除しかやらせてもらえない。しかし、そこには小林氏の考えがある。

「動きの中から生活は見えてくるものです。家具をどこに置けばいいのかも動きの観察の中で分かってくる。現場での掃除もそれと一緒です。先輩の職人の動きの中から、どのように現場を整理すればよいのか、道具を配置すればよいのかといった事を学ぶ。それが職人として働く第一歩なんじゃないでしょうか。」

小林社長

株式会社　小林インテリア

- 業種：建築リフォーム工事業（内装工事、インテリア販売）
- 住所：長野県岡谷市長地権現町
- 代表者：小林武志
- 設立：大正3年
- 従業員：26名
- 技能士：17名

技能士へのインタビュー

南　嘉一氏　（40 歳）

1 級表装（壁装作業）技能士
1 級内装仕上げ施工（プラスチック系床仕上げ工事作業）技能士

作業から他の業者との調整まで行う多能工

現場からインタビューのために駆けつけてくれたのは、工事部の南氏。南氏は現在 1 級表装（壁装作業）技能士、1 級内装仕上げ施工（プラスチック系床仕上げ工事作業）技能士であり、第 25 回技能グランプリの優勝者でもある。日々現場で内装工事を主導したり、現場を共にする他の業者と業務調整したりと、まさに小林氏が言う「なんでもできる技能士」の 1 人であると言うことができるだろう。もともとものを作ることが好きで、漠然とものづくり産業に携わることを考えていたが、「高校の教育指導の先生に勧められて」同社に入社したという。

「技は盗め」という教え方の背後にある思想

「現場に入った最初の頃は小僧扱いでしたね。掃除、道具の片付け、荷物の積み下ろしが仕事でした。」と入社当時を振り返る。自分も仕事を覚えたいのだが、そういう機会はそういった基本的な仕事が終わらないと親方には教えてもらえない。「だから一生懸命、仕事早く終わらせようとするんです。でないと、次の仕事が覚えられないですから。」

「先輩の技を盗む」といった昔ながらの教育風景は今では少なくなってきた。しかし、そこには基本的な作業に習熟してから次の作業を覚えさせるという思想があったことがうかがえる。「時に今の自分では無理と思えるような作業をもらうこともありました。でも今思えば、そういう『やれなさそうでやれる』仕事をもらっていた気がします。若手のスキルレベルを見極めて仕事をまわす、そういう育て方をする親方が多かったですね。」言葉は無くとも、決して若手自身の成長に任せっきりにしない教育のスタイルが日本の現場にはあったようだ。

もちろん結局自分ではできないような仕事もある。そういう時には必ず親方が飛んでくる。「このときに、自分が現場でやったことをきちんと説明できないと、『何やってたんだ。』と怒られましたね。だから、現場に行ったらまずきちんと段取りして、作業の全てができないにしても、考えていたことを説明できるようにならないといけなかったのです。」そういうやり取りの中で、段取りの重要性を学んでいくのである。

コミュニケーションツールとしての技能検定

現場で仕事を覚えていくのと並行して、技能検定にも挑戦した。「技能検定を受検しようと思ったのは、会社からの働きかけももちろんありましたが、自分で挑戦しようと思った、という部分もあります。何をやるにも勉強が必要だと思っていましたし。」

職人気質だった父親から、技能検定の話を聞いていたこともあり、早い段階で技能検定を受検した。現在は 2 つの職種で 1 級の技能検定に合格している。そんな南氏にとっての技能検定受検のメリットとはどのようなところにあるのだろうか。

「技能検定に挑戦してから、仕事に対する姿勢が変わったような気がします。技能士だからこそ、下手なことはできないという自覚ができたというか。それと、技能検定で問われる基本的な知識は、先輩方の何気ない言葉やアドバイスの裏の意味や意図を分かるために役に立ちました。別にアドバイスでなくとも、先輩と雑談する機会が増えたのもメリットですね。『俺もここで失敗したんだよ。』とか普段の現場では聞けない話を聞くことができたのも、技能検定の効果かなと思います。」

技能グランプリ挑戦時の南氏

回り道をしなければ見えてこないもの

今後は、日本の伝統的な技能を学んでいきたいという南氏。「昔の日本の技能は今でもなかなか真似できないほどレベルが高いんです。これからはそういったことにも興味関心を持ってチャレンジしていきたいですね。」

かつて洋風のインテリアに可能性を見出した小林インテリアが、日本の伝統的な表具の世界から、新しい可能性を発見していくかもしれない。